

批評と紹介

D・L・スネルグロウヴ氏編著

「ヘーヴァジュラ・タントラ の批判的研究」

D. L. Snellgrove: *The Hevajra Tantra. A Critical Study. Part I Introduction and Translation*, XV, 149 pp.; Part II *Sanskrit and Tibetan Texts*, XI, 188 pp. SOAS Univ. of London, London Oriental Series Volume 6. London (Oxf. Univ. Press) 1959.

辻 直 四 郎

本書は二部からなり、第一部は序論(p. 1-46)と英譯(p. 47-119)のほか、内容の摘要(p. 121-125)、マントラ略圖(p. 126-129)、特殊語の説明(p. 131-141)および索引(p. 143-149)をめぐみ、第二部は梵藏對面のテキスト(p. 1-101)と梵文の注釋カーンハ作ヨーガ・ラトナ・マーラー(p. 103-159)のほか、語彙(Select Vocabulary: Tibetan-San-

skrit-English, p. 161-177; Sanskrit-Tibetan, p. 178-188)を収めている。以下IIはそれぞれ第一部・第二部を指し、三個の數字(例えばI. 1)は梵文原典の個所を示す。

ヒンドゥー教關係のタントラに比べて、佛教タントラの梵文原典の出版は比較的に少く(cf. I, p. XIII-XIV; 山田龍城 梵語佛典の諸文獻 1959, p. 146-183)。その研究は近頃G. Tucci 教授の勞作によつて大いに進展したが、この方面の學界は、根本資料の批判的出版・研究に期待するところ甚だ多い。Buddhist Himalaya (Oxford 1957) においてタントラ佛教に對する濫かい理解を示した著者が、本書によつて極めて重要な學術的寄與をなしたことは、深い感謝に値する。

タントラは種々に分類されるが、ヘーヴァジュラ・タントラ(以下H・Tと略す)は、その中の最上類(anuttara-yoga-tantra)に屬し、中尊ヘーヴァジュラの配偶を始めたする明妃が重要な役割をもつため、yogini-tantraの一種と目される(I, p. 30, p. 132, p. 138-139)。H・Tは藏譯(Kyehi rdo rje rgyud, 東北目録 No. 417, No. 418)および漢譯(宋法護譯大悲空智金剛大教王儀軌經、大正藏八九二番。山田龍城前掲書一七一頁及び注3参照)のほか、多數の藏文注釋が残り(I, p. xiii, II, p. vii-viii)。本書第二部に

梵語原文の刊行された *Kaṇḥa* (*Kṛṣṇa*) の *Yogaratanmāla* (藏譯については東北目録 No. 1183) もその一つである。チベット佛教においてこのタントラが重視されたことが窺われる。

著者はまずチベットにおける佛教と、その大藏經中に占めるタントラの地位に觸れ、タントラに對する世上の非難に答え、これを一概に佛教の墮落と見なすことの誤りを指摘している (特に I, p. 3, p. 6-7)。要するに著者の目的は、梵藏文獻を使用してインドにおける佛教の一特殊形態を解明し、その起原の地におけるタントラ佛教の研究に資し、合せてチベットにおけるタントリズムを理解するための基礎をつくるにある (I, p. 2-3)。

現存の H・T は二篇 (*Kalpā*) に分かれ、それぞれ十一章 (*paṭala*) および十二章からなる。韻文を主として少量の散文をまじえ、傳統的には七五〇頌をふくむといわれる。なおその中には若干の آپパランシャ語の詩節 (II, 4, 6-8, 67, 71, 91-92, 5, 20-23, 68) が混在する。インドの他の作品について起る問題がここにも繰返され、かつては遙かに長い廣本——三十二篇、五十萬頌 (*Vairāgarbha*) 或は十萬頌 (*Bu-ston*) —— が存在したと傳えられ、また注釋者ヴァシユラガルバは、しばしば六千頌からなつたという根本タントラ (*Mu-*

lantantra) を引用している。しかしこれはむしろ H・T 自體より新しく、古い注釋家には知られていなかったと思われ。H・T 成立の過程および年代は、明確に決定できないが著者は傳流の系譜、注釋の年代關係から推論して、八世紀の終りごろにはすでに存在したと結論し (I, p. 12-18)、注釋書ヨーガ・ラトナ・マラーの作者カーンハを、暫定的に九世紀初期の人と認めている (I, p. 14, n.)。

次いで著者は、H・T を中心として、佛教タントラの内容を簡明に記述している (I, p. 19-39)。哲學的基礎は明かに中觀派の空思想にあり、龍樹の名はタントラ佛教の傳承に重きをなしている。なお學習の順序として、毘婆沙論、經量部、瑜伽行派、中觀派を挙げ、その上にヘーヴァシユラを置いていることは (II, 8, 9-10)、注目に値いする。涅槃と輪廻との根本的一致を主張し、神秘的體驗と感覺的悅樂との不離を強調し、しかも左道的色彩の極度に強い H・T にあつては、その教義はあくまでも男女兩性の原理に配當され、智 (*prajñā*) = 空性 (*śūnyatā*) = *Nairātmyā* (*Prajñāpāramitā*), *padma* 'yonī', *rakta* 'blood' を及び方便 (*upāya*) = 悲 (*karuṇā*) = *Hevajra* (*Heruka*, *Saṃvara*), *vajra* 'liṅga', 'sukra' 'semen' といふ恒等式を樞軸として展開する。ヘーヴァシユラは、*he* = *mahākāruṇā* + *vajra* = *pra-*

gña)と説明され (I. 1. 7. 本來は *hevajra* I v. 1, p. 10, n. 1)。
ヘーヴァジュラとその配偶ナイラトミヤーとの本源的一致
を前提として二即一の教理に徹底している。智と方便との合
一から菩提心 (Bodhicitta) が生じ、一切苦を離脱した究竟
の目的すなわち大樂 (mahasukha) に到達する。サンサー
ラ (輪廻・現世) をほかにしてニルヴァーナなし (II. 4. 32)
衆生は即ち佛陀なり (II. 4. 69, 73-78) と斷言するタントラ
の立場からは、一切は空なるがゆえにこそ、絶對的眞理たる
空性に參與し、現實の體驗は清濁を超えてそのままに最高智
悟證の縁となる。ただしその手段としては、普通のヨーガの
修練にのみ頼らず、修行者 (yogin) と修行女 (yogini) と
の結合によつて、智と方便との合一を象徴するから、セクシ
ュアリズムを忌憚する佛教本來の立場から離れること遠く、
常識を超えて面目を一新する。

タントラ佛教もまたインド宗教の所産であるから、ヴェー
ダ後期以來普遍化した宗教・哲學的要素を吸收し (e. g. I.
5. 1: Brh. Up. IV. 3. 21-30, I. 5. 11; cf. I, p. 20, p. 28, p.
35) ことに大宇宙と個體との對比或は一致を強調し、個
人の肉體的構造を神秘的に説明し、ヒンドゥー教タントラに
似て、血脉 (nadī) すなわち生氣の導管および輪 (cakra) す
なわち心靈の中心を列舉し、かつこれらに重要な意義を附加

している。修行者の個體はそのままに大宇宙を象徴するか
ら、それは内觀による神秘的經驗の場となり、諸尊の配置を
外面的に具現するマンダラに對して、内面的マンダラ (sah-
vara) が展開され、究極の大樂が悟證される。この外 H・T
にふくまれる實踐的修行、師匠による四種の灌頂の儀式 (ab-
hiseka) 〔これに伴う四種の歡喜・刹那の教義、佛身觀、諸
種のマンダラ、印契 (mudra) 眞言 (mantra) 持誦 (japa) 〕
種子 (bija) 等に關する規定・説明ならびにその神秘的意義
について、その概略を知ろうとする讀者には、著者による序
論の一讀をすすめる。H・Tの記述は組織的な順序を追わ
ず、關連事項が離れた章節にふくまれている場合が多いので
前後参照する必要がある、内容の摘要 (I, p. 121-125) と術
語の説明 (I, p. 131-141) は、讀者に多大の便宜を與える。

左道の佛教タントラについて、世上の批判的となる修行
者と修行女との性的行爲は、灌頂の規定にふくまれ (I, p.
33-35, p. 42-44) 不潔物を聖餐 (samaya) として飲食す
るじや (特に I. 7. 21, 11. 8-11, II. 7. 5-13; cf. I, p. 43) 〕
「殺」(māraṇa, 特に I. 7. 21-22, II. 1. 6, 8-10, 9. 1-6; cf.
I, p. 32, n. 4, p. 38) もまた常人に慊惡の情を起させ得る。
ただしいかなる儀式にも比喩的・神秘的解釋が用意され
た (「殺」に關しては特に I. 11. 6, cf. I, p. 86, n. 1) 〕注釋者

は具體的實行よりも、その背後にひそむ秘義に重點を移して
いる。この緩和の傾向を看過することはできないが、少くも
原文を字面に即して讀むかぎり、大樂を象徴する性的結合、
糞尿・人肉の飲食、殺害行爲も、その起原においては實行を
予想したものと考えざるを得ない。タントラにおいては實行の
一面を代表するとしても、古來インド宗教の表面に現われな
った通俗信仰或いは下層社會の習俗が、ここに吸収され、反
映していることは否定できず、タントラ研究の興味の大半は
この點に存する。とにかくタントラの世界においては、神秘
的體驗のみが眞に現實であり、最高の目的に導くものである
以上、世間の價值は全く逆轉し、道德の基準は顛倒し (cf.
II. 3. 29-30)。¹⁾ 忿怒・愛慾のとき惡徳も、人間の本性に根
ざす激烈な心情の發露であるかぎり、悟證の手段として重ん
ぜられ (cf. II. 2. 46-51)。²⁾ 善惡・虚實の境界は没却し去られ、
正常の論理はその機能を失う。

人間は五種の部族 (kula, tathagatakula) に分類され、
五佛およびその明妃に配屬されるが (特に I. 5. 5-7, II. 4. 16-
19, 100-103, II. 1-9; cf. I, p. 30, p. 128)。³⁾ インドの哲學・
宗教・文藝のあらゆる分野に共通する分類癖は、タントラに
も強く現われ、五の數のほか、三分法または四分法 (I. 1. 30:
evam sarve catvārah) もしばしば使用されている。前述

のごとく H・T はいわゆるヨーギニー・タントラで、五佛の明
妃および多くの佛母 (dakini, yogini) が重要な地位を占め
ている。主尊ヘーヴァジュラは、その明妃ナイラートミヤー
と共に、忿怒を象徴し、ヒンドゥー教におけるシヴァおよび
ドゥルガーの恐るべき一面に類似しているが、神話の見地か
ら特に興味をひくのは、ヘーヴァジュラのマンダラ (特に I.
3. 1-18, II. 4. 79-88, 5. 1-37; cf. I, p. 29-31, p. 122 sub
Reality, p. 126-129) を構成する明妃・佛母の名である。そ
の中には、Dombi (: domba), Caṅḍali, Pukkasi (: pul-
kasa) のように、最下層民の名稱に基づくものがあり、普
通ヒンドゥー教の神話に見える女神とは全く趣きを異にし、
タントラ佛教の興つた社會的背景を示唆している (cf. II. 3.
45, 4. 76; I, p. 10, p. 17, p. 45-46)。⁴⁾ ただし著者は、タント
ラにおける明妃とヒンドゥー教のシャクティとを同一視する
ことに強く反對し、その相違に注意を喚起している (I, p.
42, n. 1, p. 44)。⁵⁾

著者は序論の最後の一節 (p. 39-46) を、タントラ佛教の
總括的評價にあて、現世一生の間に佛陀となり得るとする教
義に新しい魅力のあることを指摘し、性的結合・人肉食用に
關する宗教史的意義を説明するに努め、かつタントラ佛教の
陥り易い危険に論及している。著者の見解は終始批判的であ

ると同時に、きわめて同情的で、従来の偏見を是正するに役立つ。しかし、タントリズムがその中核において佛教の一變貌たるを失わないとしても、佛教の他の形態と著しく相違する点を見逃すわけにはゆかない。またその反面、タントリズムの發達の歴史が、インドの下層信仰のそれと密接に關係する點を、過少に評價することも許されない。要するに、タントラ佛教もまたインド精神の一所産である以上、いたずらにこれに反感をもつことなく、その基盤をなした社會の信仰・習俗の研究と相まって解明されなければならない。著者がこの方面の學術的研究に貴重な資料を提供し、さらに多くを提供しようとする熱意に稱讚を惜しまない。本文の筆者は密教の素養を缺き、チベット語の知識に乏しいので、この種の著作を批判する資格をもたないが、あえてこれを一般に紹介したのは、上記の諸點を重要と考えたからである。

最後に出版・翻譯につき一言する。著者は梵文校訂のために三個のネパール寫本を使用し、藏文はナルタン版を基底とし、カーンハの注釋はベルゴール文字の古い寫本（十二世紀後半）に依つてゐる（II, p. vii）。英譯はできうるかぎり原文に忠實であることを期すると同時に、藏譯および梵藏の注釋書を涉獵して本意を傳えるに努め（II, p. viii-x, cf. I, p. 10-11）、適當に字句を補足し、時には簡素化し、詳細な脚注

と相まち、一讀して誰にも理解できるように工夫されてゐる。ただし漢譯は、藏譯と異なり、原本の字句を追わず、梵文の解釋に資するところが少いので、若干の場合を除き、利用されていない（II, p. viii）。梵藏文の出版により、今後はむしろ漢譯の正當な理解に、多くの便宜が與えられるものと思ふ。本書に用いられた梵語は、一般に單純な構文を示しながら、正規の文法に照らして不正確な語形・語法に満ち（II, p. xxi）、類書の用語と合せて「タントリック」と呼ぶのがふさわしい。いかなる名で呼ぶにしろ、梵語の一種であることに疑いなく、筆者は梵語學の立場からかえつてこれに特殊の興味を覺える。しかし一般の讀者を煩わすのを恐れ、文法的事實は一括して附録に收めた。この方面に關心をもつ學者の一覽を得れば幸甚である。

附 録

H・Tの言語につき校訂者はその不正確な點を指摘し、*Buddhist Sanskrit* の名にすら値いせず、正に *bad Sanskrit* に過ぎなぐと言ひ、注目すべき文法形としては、*karat* 3. sg. opt. absol. -ya の誤用例 *vadya*, *grhya*, *pujya* を挙げれば足りるとし、*पु* と *भु* との混用、頻繁に起る名詞

の性の誤用等に觸れ、韻律も決して常に指針とすることができず、時には全寫本に反して是正する必要があったと述べて若干の例を擧げている (II, p. x-xi)。たしかに H・I の梵語は不正規形に滿ち、格 (こと) に inst., abl., tas, loc.) が用法の放漫であること、合成語の要素相互の關係がいろいろであることは、全篇を通じて、弛緩した梵語の印象を深める。しかしこれらの現象は、本書にのみ限られたことでなく、タントラおよびこれと同類の文献に共通して認められ、梵語の一類型として考慮されるべきである。 Cf. L. Renou: *Histoire de la langue sanskrite*, Paris 1956, p. 122-123. *Buddh. Hybrid Skt.* 及び *Buddh. Skt.* にいろいろは、その名稱・範圍・種類等に關して種々の見解が可能であるが (cf. Renou: *Introduction générale*, Göttingen 1957, p. 20-21 cum nn. 81-85) 、『つむぎの Tantric』もまた梵語の一類型であるかぎり、梵語史の觀點から研究される價值なこととなり。もちろんこの場合ひろく類書にわたつて資料を集めて比較検討すべきであるが、今は H・I を通讀した際目にふれた言語事實の中、注目すべき若干の例を提示するにとどめる。 Edgerton: *Buddh. Hybrid Skt. Grammar and Dictionary*, New Haven 1953 (以下それぞれ EG, ED と略す) は、若干のタントラ文献、特に Manjusrīmulakalpa, Sādhana-

śāstra からも採録し、以下に擧げる文法的不規則形は、ほとんど全て EG の中に類例を見出すことができるので、簡單を期してもっぱらこれのみ参照することとした。文法の術語または短い説明に英語を用いたのもまた簡明のためである。

Sn. = Snellgrove.

- I. 音論。長母音が予期されるところに短母音が現われる場合、或いはその反對の場合 (EG 3. 5 sqq., 3. 27 sqq.)。以下の例は韻律から判定できないので、ネパール寫本の書記上の問題に過ぎなうかも知れず、また誤植の疑いが全くなくとも言えなう。 Śukranāma inst. for 'ā, II. 2. 41, (EG 3. 30); parikṣethāḥ (emend. Sn.) 2. sg. opt. for parī, II. 2. 8, 9 (EG 3. 38), 'kṣasva is also possible, cf. v. 1. -kṣasva ms. B; tathatāyāḥ I. 5. 8 (EG 3. 36, ED sub tathatā); abhuvan from bhū-, II. 4. 68 (prose) (EG 3. 46); dvisanikhyaṭaḥ 'secondly' I. 10. 13 (contra met.); sutarāḥ = sutarām II. 5. 41; vīkṣyā (emend. Sn.) absol. for 'ya, II. 3. 23 (EG 3. 8, 35. 10); kriyate pass. from kṛ-, I. 7. 21, a contamin. with the pkt. pass. in -īyate?

備考。音論にまつても形態論にまつても、ハンプトランシヤ

kitā (all mss., *tām emend. Sn.) mukutī (all mss., *ñim emend. Sn.)…… yojayēt I. 6. 15; ——— -añ acc. sg. f.

(EG 9. 16) : mahābhāṣāñ II. 3. 55 (cit. supra III in fine)———ā inst. sg. f. (EG 9. 65) : Nairātmayā saha II. 5. 10; śavakeśasya kuccā ‘with a brush made from the hair of a corpse’ (Sn.) II. 6. 7. ——— -ā nom. pl. f. (EG 9. 82) : etā mudrā susiddhidā (end of a half-verse) II. 3. 63; yoginyañ paramaviśmayam āpannā || (before etāñ) II. 4. 65 (prose); santrastā avanau patitā || (before dhūna-) II. 4. 66 (prose).

ç 一 塵 華 ° -ī nom. sg. m. (EG 10. 27) : ādī II. 4. 20. ——— -im acc. sg. n. (EG 10. 45) : akṣim II. 5. 64. ——— -im acc. sg. f. (EG 10. 59) : gatīm II. 4. 77. ——— -yā gen. sg. f. (EG 10. 123) : avīçyā tyāñyāhetunā (separate so) I. 6. 22.

ç 一 塵 華 ° -ī acc. sg. f. (EG 10. 54-55) : mukutī (all mss., *ñim emend. Sn.) I. 6. 15 (v. supra b). ——— -im acc. sg. f. (EG 10. 44) : khecarīm II. 9. 17. ——— -ī voc. sg. f. (EG 10. 41) : devī (all mss., devī emend. Sn.) II. 1. 12; paśya devī mahāratanā II. 9. 8. ——— -ī acc. pl. f. (EG 10. 187) : devatī (ms. A, *tī ms. B, *ñim

ms. C; sarvadevīr or devatīr emend. Sn., cf. II, p. x) dīṣivā II. 4. 66 (prose).

ç 一 十 種 塵 華 ° -am nom.-acc. sg. n., type nāman (EG 17. 10) : bodhyañga-saptan tu II. 9. 13. ——— -antam nom. sg. m., pres. part. : tarijyantam (mss. A and C; *yañ ca emend. Sn., cf. II, p. x) surāsūran II. 5. 27, better *yantah su° (EG 18. 6); for -añ for -añ cf. supra 2 a. ——— -a nom. sg. m., pres. part. (EG 18. 55, -a for -añ EG 8. 22-23, cf. supra 1 a) : bhūñjan ācama (emend. Sn. for *mana mss. A and C, *manam ms. B) pūgañ bhakṣayan II. 2. 5, read perh. ācaman. ——— -āñca nom. pl. m., as -anta for -antah (EG 18. 86) : narakapretatiryāñca (*añ ca Sn.) devāsūramanuṣyakāñ II. 4. 73; -tiryāñ ca, of course, not impossible, cf. EG 15. 3, ED sub tīrya.

以上の諸例の中には、簡単な修正による、正規の形に變え得るものも少なくない。しかし書記・傳承の誤りによる「タンマリン」特有の記號事實による、明確に區別するべき困難な例がある。

II. 6. 10.

2i traya- for tri-: I. 2. 20 (p. 8. 5, prose): trayahas-
tam maṅḍalam trayāṅguṣṭhādhikam (read so), cf. I.
10. 5: trihastam m° karyam trayāṅguṣṭhādhikam tu.

VIII.

格の用法。一般に構文は簡素であるが、省略が多く、

緊密性を缺き、しばしば放漫に流れている。格の用法を本来の領域を逸脱し、古典文法の基準で律するものが多い。校訂者は次の特殊な用例に注意を喚起しよう。I. 3. 2: nyāsam (= nyasyet) akṣaram, I. 6. 4: bhakṣaṇam daśard-hāmrtam (I, p. 67, n.). Nomen actionis などの語類辞典的語彙並置や、後者を objective gen. の価値や、場合により解される。EG 7. 16 はやをりれに近う例を命じている。格の用法の弛緩を示す一例を擧げれば、I. 10. 22: dhūpaṅ dipaṅ tathā gandham aṣṭakalaśādhibir yutam (sc. maṅḍalam acc.) と接して、ささねささねささねささねささねささね etc. を中期や。校訂者も述べた、'the mixture of nom. and inst.' という語の (II, p. x) 次の例を擧げよう。II. 3. 54: hasitam ceksanābhyan tu ālīṅgam dvandakais tathā 'As for the smile, the gaze, the embrace and the union' (Sn.). ささね sociative inst. ささ saha 帯

伴やちの並用や、結果と認められる。同様なものや acc. と共に起る例。e. g. II. 3. 47: pūtsurabhi jalāsrṅ bodhicittena ('together with semen', = -cittam) bhakṣayet. ただし上例はマヤスタに於ける inst. の特殊用法 (Reichert Awest. Elementarb. S 427) を類推するものとして興味がある。

次に若干の例を擧げよう。

† Nom. pendens (EG 7. 13): II. 9. 3: māraṇam kriyate kripayā... | śāsanāyāpacāri ca gurubuddhasya nāśakah. 'Such slaying is done from compassion, ... (and is directed against) those who bring harm to the doctrine or injure one's guru or other buddhas.' Sn.; II. 2. 34: utpannabhāvanāhīno (sc. yogah?) utpat-tyā kim prayojanam, if the reading -hīno is correct; the regular sandhi would require -hīna, i. e. -hīne.

2i Akk. for the loc. (EG 7. 23): II. 4. 15: vyastakulam bhāvanāyogān na siddhi (v. supra IV, 1 b) nāpi sādhnakah, 'within the wrong family' (Sn.).

2i Inst. absol.: II. 5. 13: tvayā (sociative) mayā... kṛīḍatā (emend. Sn. accord. to Kaṇha). 'While I am playing with you'.

4 Gen. with puḥ- 'honour' (EG 7. 69): II. 5. 60: āsān pūjayed yogi; II. 7. 11: pūjāyen nirbharān tā-sān. ——— with ni-as- 'place': II. 7. 9: yoginīnām tato nyaset. ——— with mṛṣ- 'not heed': II. 3. 26 (prose): atha sarvayoginām bhaginām mṛṣivā (= mārṣayivā in sense). 'Then, begging all the yogins to have patience' (Sn.). ——— with pā- 'drink': II. 3. 48: śleṣmaśiṅghāṅkānān tu miṣṭikītya pībed vratī. ——— with the causative: II. 5. 61: tāsān pāyayed yogi. 'The yogin should cause them to drink (it)'; II. 4. 37: madanam pāyayet tāsān (all mss., tasyān emend. Sn.; the context requires the sg., but the loc. would be equally bizarre).

最後に古く傳統に従つて用法として、-aka+acc. (cf. Pan. II. 3. 70) の例を擧ぐ。II. 4. 77: imān gatim ajānakāḥ (EG 22. 6, ED sub jānaka). 亦た佛敎梵語の普通な表現 yena.....tena 'where.....there' (EG 7. 32) 及び II. 3. 40 (prose) を見つけた。

IX. 時・法の用法。現在形または規定を示す願望法を多く含む單純な文章、或いは人稱形を多くまない nominal sen-

tence が大部を占めることゝ注意。時・法及びついでに語の多くは少ない。

次の文におつては、現在ののプートネー形が明白な受動の意味を帯びてゐる。II. 4. 75: na buddho labhate 'yatra. 'No buddha is found elsewhere' (Sn.).

過去の意味で用ゐられた願望法 (EG 32. 85 sq.) は、物語の書や註に於て認められる。II. 4. 90: Vajrasattvo diśed ballin (cf. ibid. 89: tatra pṛcchati Nairātmyā); II. 5. 1: atha Hevajrah maṅḍalam samprakāṣayet; simil. ibid. 5. 10: 物語は知らぬが、一般的规定に移行したるその限界を明確に決定するものはない。例として likhati (emend. Sn.) II. 5. 49 ——— likhet or samlikhet ibid. 52, 53, 54, 55 ——— dadyāt ibid. 56, etc. till 65.

X. 語彙。種子 (bija) (例として hūm = Hevajra-Heruka, a = Nairātmyā) の類。特に I. 2. 2, 6, II. 4. 20-23, 5. 28; I, p. 26-27, p. 32, p. 36-37, p. 50, p. 57, n. 1; Index sub 'seed' 参照) は、佛敎義上の術語 ('aham', 'evam' の類) を含む。I, p. 131-141: Glossary, p. 143-149: Index 参照) のほか、H・I は注目すべき単語を豊富に含む。以下その若

十を纏ぐる表示ナレ。

1 秘語 (saindhvābhāṣa, v. supra III, 出レハセ saindhābhāṣā 'langage intentionnel' Filliozat L'Inde class. II, p. 593)。秘語ニ II. 3. 56-60 並ニ語ヲヤベ' マントムランシヤ (II. 4. 6-8, cf. I, p. 101, n. 2) 並ニ其ノ秘語ヲ多數ヲヤベ' 梵文中ニモ隨所ニ用ジラレ' ンガ' 次ニ秘語ヲ列擧シ' 秘義ヲ添エ' 此レニ關連シテ説明ヲ加セ。

II. 3. 56: madana- n. = madya- 'wine', II. 4. 7 (apabh.), 37, 5. 61, 6. 9, 7. 12, 11. 13, 15. ——— bala- n. = mānsa- 'flesh, meat', II. 4. 7 (apabh. baru), 5. 61 (bala-śālīja-), 11. 15. ——— malayaja- n. = milana- 'meeting', II. 4. 7 (apabh.). ——— khetā- m. = gati- 'going', II. 4. 8 (apabh.); from which meaning of khetā? Sn. gives 'hide?'; but cf. ED s. v., Mayrhofer Et. Wb. I, p. 311. ——— śrāya- m. = śava- 'corpse' II. 4. 8 (apabh. sarābā). ——— nirañśuka- 'naked' n. = asthyābharāṇa- 'bone-ornament', II. 4. 8 (apabh.), 6. 10 (°kañ bhūtvā 'adorned with the bone accoutrements' Sn.), 10. 2 (°kaiś). II. 3. 57: prekhāṇa- n. = āgati- 'coming', II. 4. 8 (apabh.). ——— kṛpiṇa- n. = dāmaruka- 'drum', II. 4. 6 (apabh. kibidā), 5. 30, 54; a RV-word! 'Gesträuch'

x. 28. 8, cf. Mayrth. s. v. ——— dundura- adj. = abhavya-unworthy; II. 4. 7 (apabh.), 7. 3, 8. 8. ——— kāñjāra- adj. = bhavya- 'worthy'; II. 4. 7 (apabh.).

II. 3. 58: diñḍīma- adj. = asparśa- 'untouchable'; II. 4. 8 (apabh., = Dombi, cf. I. 5. 18). ——— pādmabhāṇāna- n. = kapāla- 'skull'; I. 8. 20, II. 5. 31, cf. padmabhāṇāna- 'skull' II. 3. 48. ——— tṛptikara- n. = bhakṣa- 'food', ——— mālatīndhana- n. = vyañjana- 'herbs'; II. 4. 7 (apabh.), 7. 10.

II. 3. 59: catuhsama- n. = gūtha- 'dung', II. 4. 7 (apabh. causama), 10. 4. ——— kastrikā- f. = mūtra- 'urine' II. 4. 7 (apabh. kacchuri), 10. 5. ——— śhlaṅka- 'frankincense' n. = svayambhu- 'blood, rakta' (cf. svayambhūkusuma- 'blood from menstruation' II. 3. 48), II. 4. 7 (apabh. śhla), 10. 4. ——— karpūra- n. = śukra- 'semen', II. 4. 7 (apabh. kappura), in the form karpūra- II. 4. 13, 27, 38, 40, 5. 60, 11. 15, comp. with śhla- II. 2. 18 (cf. I, p. 90, n. 2), 4. 36, 8. 4; synonym. of śukra- (cf. I, p. 25, Index s. v.): bodhicitta- e. g. II. 2. 18; akṣobhya- I. 1. 15, 2. 23; candra- I. 1. 15, while prajāñ = rakta, cf. I, p. 49, n. 1; bindu- II. 3. 14; amṛta-

ju' Kāṇha, ka' diviveta 'the two-stranded cord of hair' Sn. I. 6. 16. — karota- 'skull' II. 5. 55. — karti- I. 3. 18 (prose), kartṛ-, kartṛkā, kartṛi- 'knife', from kṛt- 'cut', v. Index sub 'knife', cf. vajrakartari-vidhi- 'the ritual of the vajra-knife' Sn. I. 2. 22. — kuc-cā- 'brush' II. 6. 7. — kurpara- 'thigh' II. 11. 13. — khinkhrikā- 'fan' II. 5. 32. — carmāra- 'a low caste' II. 3. 45: domba- caṇḍāla-ca°haddikādyān duhs-parśān. — cauryakeśa- 'udbaddhakeśa' Kāṇha, I. 6. 15: -kṛtāṅ muktūṅ (emend. Sn., cf. supra IV, 2 b, d) yojayet. 'He should arrange his piled-up hair as a crest' Sn., cf. I, p. 65, n. 1: caṇḍakeśa-. — ceṇḍakāra- 'a low caste' II. 4. 76 (v. I. caṇḍak° ms. B). — chandoha- and other words for 'meeting places' (v. Index s. v.) I. 7. 10-18, cf. I, p. 68, n. 1, p. 69, nn. 1 and 2. — chardā- 'sickness' I. 10. 33; cf. chardi-. — chomā- 'sign' I. 1. 8, 7. 1, cf. I, p. 66, n. 1. — jagā- = jagat- I. 9. 20: sarvaviśuddhyā śuddhasahāva (v. I. svabhāva ms. A) jago (nom.) jagā manye, jagā : prob. voc. 'oh world, in my opinion', differently Sn. 'Ah, I know the world', cf. I, p. 81, n. 1. On jagā- v.

EG 15. 1 and 2; one of many examples of thematization, e. g. usma- 'heat' I. 6. 7, vyāghra-carma- II. 7. 8, tīya- 'animal' II. 4. 73 (if Sn.'s reading is to be adopted, v. supra IV, 2 e); by adding -a, esp. -rūpiṇa-, I. 10. 32: tattvaṅ jñānarūpiṇaṅ, II. 4. 30, 40, 55, 103, 5. 11, 78, 7. 8, cf. II, p. x; vikarāliṇa- 'distorted' II. 5. 12. On the contrary upādhyāyin- = °ya, nom. °yī II. 4. 62. — jālāsṛi- 'spittle' II. 3. 47. — jyalaçivara- 'yellow robe' II. 4. 61. — devati- = devatā- II. 4. 66 (prose): sarvadevati (ms. A, -devīr or -devatīr Sn., v. supra IV, 2 d) dīṣṭvā, cf. ED sub devatī. — dvandaka- 'sexual union' II. 3. 54, cf. dvandvatantṛaka- II. 3. 11, mahādvandvasamāpatti- II. 5. 16. — dhvajja- 'a man who has been hanged' I. 7. 21, cf. I, p. 71, n. 1, p. 72, n. 4. — dhṛk- = -dhṛt-, vajra-dhṛk- = -dhara- (I, p. 140 and Index s. v.), techn. 'the name by which the master addresses the pupil during the rite'; I. 8. 16: kartṛ-kapāla-dhṛk-karāṅ 'their hands clasping the knife and the skull'. — naraka- 'skull' II. 5. 52, -stha- II. 6. 7, mahā- II. 7. 12. — nityatām = nityam 'always' I. 6. 14. — nirvṛtāyate den. 'is

recognized as nirvāṇa' II. 4. 34, cf. nirvṛti = nirvāṇa- I. 4. 35, I. 5. 13 (†as), v. ED sub nirvṛta and 'ti. — puttalī- m. 'eye' I. 11. 1, 2. — prāñivandha- 'killing of living-beings' II. 6. 4, prob. graphic for -bandha-, then cf. paṣubandha- — mahāmaddhu- 'collyrium', II. 7. 2: -masiṇ kṛtvā. — moṭana- or ā-mo° 'pressure' I. 5. 20: aṅgulyāmoṭanaṁ, 'yā mo° or 'y-āmo°, 'the pressure of one finger upon another' Sn. — yukti- 'connection, argumentation', gramm. term, cf. Renou Terminologie gramm. sub yukta, I. 3. 16: śvasatīy anayā yuktyā śmasānety abhidhiyate. This quasi-etymology implies the equation śvasati 'he breathes' = śvasasati- 'resting-place of corpses' as Sn. 's transl. shows and presupposes the interpretation śma(n)- = śava- (cf. Nir. III. 5: śma śarīram, H.W. Bailey RO 21, 1957, p. 66-69). Esoterically vajra- means abhedya- and satva- means tribhavasyaikatā, then it is said I. 1. 4: anayā prajñayā yuktyā vajrasattva iti smṛtaḥ, 'by this argumentation, that is, true knowledge' ('because of this device' Sn., cf. I. p. 47, n. 3); simiḷ. I. 5. 8: tathatāyāṁ gataḥ śrīmān āgataś ca

tathaiva ca | anayā prajñayā yuktyā tathāgato 'bhidhiyate || On the other hand II. 4. 88: tayā yuktyā 'in that same manner' = tenaiva nyāyena ibid. has no etymological reference. — riṣṭikā- 'soap-berry tree' II. 10. 2. — lekhanā- 'pen' = lekhanī- II. 7. 2. — vajra- as simplex or as a member of a compound very often used in our Tantra which professedly belongs to the Vajra-family in various meanings and nuances (cf. I, p. 140, and Index s. v.). vajrin- usually meaning Hevajra or guru (vajraguru-, vajrā-cārya-) can denote in pl. kāya-vāk-citta-, II. 9. 15: netraśuddhis trivajrīṇāṁ, 'The eyes symbolize the three vajrins', cf. I, p. 28. — vāyasāguru- 'sweet aloe wood' II. 8. 4. — vidarbhitā- 'adorned (with a letter)', hūñ-phaṭ-kāra-vi° I. 2. 4 (prose), phaṭ-kāra-vi° II. 9. 35, cf. ED sub vidarbhayati. — vidā- = vidyā- II. 3. 67: svasamayavidāṁ prāpya, 'having gained this knowledge of his own sacramental nature' Sn. — vināyaka- 'obstacle' (lex.) I. 4. 90 beside viḡhna-. — viṣ- trans. 'suck' II. 5. 62: tābhiś ca viṣyate bolāṁ (v. supra), II. 6. 1: saṁviṣya

naranāsikāhī, cf. II. 11. 12: viṣaṇaṁ naranāsāyāh. —
 vyañjana- 'herbs' II. 3. 58 as the secret meaning of
 mālatindhana- (v. supra). — sapāvarta- 'a man
 of irreproachable conduct who has returned seven
 times to human state' I. 7. 21 beside dhvaṣa- (v. supra),
 II. 9, cf. I, p. 87, n. 1. — sānputa- 'sexual union',
 II. 6. 2, 'the human complex' II. 9. 1, cf. I, p. 116, n. 3.
 — śiṅhāṅaka- 'mucus of the nose' II. 3. 48. —
 svayambhu- 'blood' II. 3. 59 as the secret meaning of
 śihlaka- (v. supra). — haḍḍa- 'bone' II. 10. 3:
 aśvahaḍḍena. — haḍḍika- 'a low caste, a sweeper',
 II. 3. 45, cf. carmāra- cit. supra. — heth- 'with vi-
 'have contempt' II. 11. 8: jantavo…… no vihetthyaḥ,
 cf. ED sub vihetthayati.

(慶應義塾大學教授)

ウィルフレッド・キャントウェル・スミス氏著

「現代史におけるイスラム」

Wilfred Cantwell Smith; Islam in Modern
 History, Princeton Univ. Press, 1957, xi, 317 pp.

加賀谷 寛

『現代史におけるイスラム』と題する本書は、一九五〇年
 代を通じて、最も注目されるべきイスラム研究の著書の一つ
 であろう。これまで一般的に、西歐のイスラム學は、イスラ
 ム神學—法學形成期の古典イスラム時代の研究を中心に大き
 な成果を擧げてきたが、近代、現代におけるイスラムの發展
 の研究領域は未開拓であつた。むしろ西歐的イスラム學の常
 識からいつて、イスラムの近代的發展を取扱うことは異端視
 された、といつて差支えないであろう。すくなくとも、第二
 次大戰後に漸く、現代のイスラムの研究がアメリカで促進さ
 れるまで、西歐イスラム學界のこの偏向が目立つている。

この著者はその意味で、異端兒である。一九四〇年代はじ
 めに、インド・イスラムにおける近代思想の發展、およびイ